

9日目 藤枝 -> 島田 -> 金谷 -> 日坂 -> 掛川

9日目は5月15日(土)に藤枝駅でバスに乗り、前回ギブアップした地点、藤枝宿の入口となる藤枝大手で降り、朝7時半にスタート、天気は曇り、最初は肌寒かったものの、歩き始めると暑くなる。藤枝と言えば池波正太郎の創作した必殺仕掛人、藤枝梅安の故郷、坊主頭の緒形拳が針を口に咥えた姿が眼に浮かぶ、しかしその緒形拳も既に鬼籍。

藤枝宿 22番目

藤枝は他の宿場と異なり、本陣や旅籠などの旧跡は殆ど残っておらず、普通の地方都市のアーケードのある商店街が続いているだけ。早朝のこととて、どの商店もシャッターを閉めているが、その商店のシャッターに色んな絵が描かれていて面白い、商売とは余り関係の無い絵が多く、しかも新しく、最近の町おこしの一つだろうが、店主の趣味や年齢が想像できて、見る方は楽しい。

糸屋



CD DVD の店



何の店か不詳、週間新潮の谷内六郎風



時計店



## 白子

白子由来の紙芝居の一枚

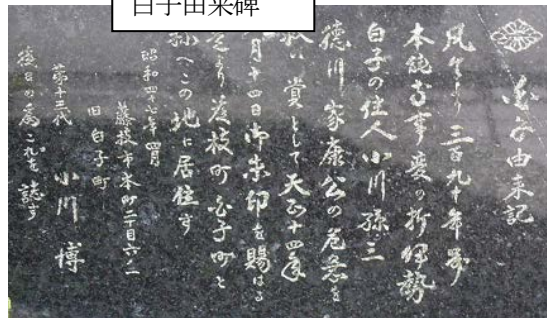


②

お話は、今から450年前前の西暦1586年（天正十年六月）に始まります。今の三重県伊勢の白子という所に、孫三という人がおりました。孫三が、家の前の田んぼで粟刈りをしていると、一人の男があわてて逃げてきて「私は怪しいものではない、だが今追っ手に追われている。どうか助けてくれ。」と頼みました。

ふと見ると山の向うに数人の追っ手が見えたので、孫

白子由来碑



藤枝宿を歩いて行くと、白子という町がある。近鉄で名古屋に行く途中にある伊勢白子と同じ「しろこ」と読む。その名前の由来を書いた石碑があって、「本能寺の変の時に徳川家康を助けた伊勢・白子出身の小川孫三がご朱印を賜り、この地に住んだ」と書かれていて、この石碑を立てたのは昭和47年、13代小川博と記されている。へえ、子孫が立てたんだと感心。この碑の横に紙芝居風の絵があり、こちらの方が面白かった。

## 久遠の松

更に街道を歩くと、「久遠の松」の標識あり、何と大袈裟なネーミングと思いつつ寄り道すると大慶寺の中に見事な松がある。静岡県の天然記念物になっていて、日蓮上人お手植えとされ、樹齢750年、幹周囲4.5m、樹高20m、枝張り27mの大きな松、確かにこんな大きな松を見るのは初めて。大木オタクのMさんは知っているだろうか。

久遠の松





## 瀬戸川

瀬戸川の堤防の緑のトンネル



藤枝宿を通り抜けると瀬戸川、「瀬戸川の徒渡り(かちわたり)」の標識があり、江戸時代に橋は無かったものの、川は浅いため、旅人は歩いて渡ったとのこと、この川の堤防の上に作られた並木道の緑のトンネルが素晴らしく、思わず写真。考えてみると「緑のトンネル」に出会うたびに感動して写真を撮っている、どこで刷り込まれたのか。

## 侘助

瀬戸の町を歩いていると、妙にひなびた家があり、「侘助」との看板がかかっている、料亭にしては店の前がオープン過ぎ、何の商いか不明、しかしそのたたずまいがいかにも「侘助」の名にマッチして写真。

更に歩いていくと、六地藏があり、六地藏は今迄の道のりにも沢山あって、最初は写真を取っていたものの最近足も止めない、しかし、普通は6体かそれ以上の数の地藏なのに、ここの六地藏は一つの石に六体の地藏が刻まれたもので珍しい。

災難消除、延命長寿、家内安全、交通安全に靈験ありとのこと、信じるものは救われる、か。

「侘助」の家



瀬戸の六地藏



## 島田宿 23 番目

蓬莱橋



道は島田宿へと差し掛かり、島田駅の近くに大井川に掛かるギネスブック認定の世界一長い木造橋、蓬莱橋の標識あり、これは見るべしと寄り道。橋の全長は897m、幅2.4mのまさに観光用の歩行者専用橋で、橋の通行料100円也。橋のたもとの駐車場には観光バスもとまっていて、見物客が多い。釣り橋ほどではないにしても、橋の中程では人が歩くことによるゆれが大きく、膝丈程度と欄干が低いこともあって、風の日には結構スリルがあるのでは。

最初は渡りきるつもりだったが、旧東海道から橋まで往復 30 分、橋を渡ると更に往復 30 分かかる計算となり、寄り道にしては長過ぎるので、半分程度渡って引き返し、旧東海道へ後戻り。

蓬莱橋



旧東海道を歩いていると、途中で同年輩の男性に声をかけられる、聞けば東京から通して東海道を歩いている、今日で 13 日目とのこと、それはきついだらうかと脱帽。 どうも最近完全にリタイアした人らしく、たまの週末に歩いていると言うと、まだ現役ですかと言われてしまった。 歩くスピードの遅い人だったので、断って先にすすむ。

#### 川越遺跡

島田の街を過ぎ、大井川の川越遺跡に到着、遺跡といっても昔の遺跡ではなく江戸時代のもので、ここには川を越す旅人が通行の為の川札を買った役所である川会所や、川越人足が詰めていた番宿が往時の建物のままで残っていて、国の指定遺跡であり、見物は自由の観光スポット。川会所では、お役人の人形があり、番宿にはふんどし一つの人足の人形がある。 今の大井川では想像できないが、往時、特に雨が降ると川越は大変だったことが偲ばれる。

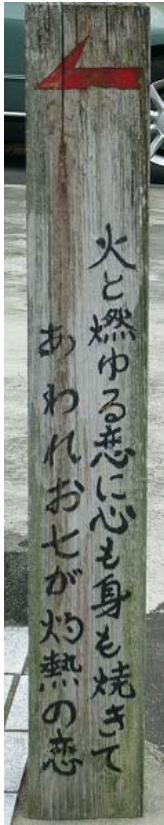
川越人足の人形



川越の役所、水槽の上の三角に積んだ桶は時代劇でおなじみ







### 灼熱の恋

川越遺跡の一面に、川越とは関係ないが、「八百屋お七の恋人吉三郎の墓」との案内標識があり、「火と燃ゆる 恋に心も身も焼きて あわれお七が灼熱の恋」と書かれている。 灼熱の恋か、いいなあ、これは寄り道せねばなるまいと、小さな墓地にある吉三郎の墓に参って写真。

この墓はガイドブックには載っていないが、ガイドブックにはないサプライズを見つけるのも旅の楽しみの一つ。



### 大井川

川越会所を出て、朝顔の松公園を過ぎ、堤防の上を歩いて、「馬方は知らじ時雨の大井川」との芭蕉の句碑を見たあと、いよいよ「越すに越されぬ大井川」を渡る、と言っても川にははいらず、自動車専用橋の横に並んでいる、歩行者と自転車用の細い鉄橋を歩く。

大井川は川幅が非常に広く、と言っても水が流れているところよりも川原となっている方が多いが、橋も当然長く、歩けども、歩けども向こう岸に着かない、やっと渡りきって橋のたもとの説明版を読むと橋の長さは1026m、やはり長い。 故郷の大淀川に掛かる橋も長いと思っていたがインターネットで調べると、馴染みの深いのは5代目で385m、その倍以上の長さ。 おかげで、現在の橋が6代目であることを知る。 大淀川ではまだ貸しボートがあるのだろうか。

沢山のミニ鯉のぼりの清水川



大井川を渡ると金谷となる。 川近くの集落に白浪5人男の頭目、日本左衛門の首塚の案内板があったが、吉三郎の墓に寄り道をしたからもういいや、などと分けのわからない理屈を考えてパス、泥棒よりも灼熱の恋。

途中の小さな川で、沢山の鯉のぼり、大きくても1m、50cm程度のミニ鯉のぼりが川面で風に吹かれていて、「鯉を大切にしましょう 清水川愛好会」の標識、この小さな川に鯉が棲んでいるのか、しかし灼熱の恋のあと

なので、「恋を大切にしましょう」と読みたくなる。

#### 金谷宿 24 番目



道は緩やかな上り坂、上がる程少しずつ傾斜がきつくなってきて、金谷駅を過ぎると、4番目の峠越えとなる「金谷石畳道」に差し掛かる、振り返るとすでに大井橋は遠く下に見える。この石畳道は良く整備され、といっても丸石が多く歩きにくい事この上ないが、ハイキングの人もちらほらいて、「こんにちは」と声をかけあいながら登る。箱根石畳よりも急勾配でかなりきついがガイドブックによれば全長 430m とのことなので、途中で休むよりは登りきって上で休憩と考え、10分程で登りきり、上にあった恐れ多くも明治天皇の記念碑に腰をかけて暫時休憩。旅のお供の FM は

山の中で聞こえ難くなり、ミュージックプレーヤーに切り替え、オープニングはザビアクガートのラテン、グリーンアイズ、雰囲気とはミスマッチ、しかし嫌いな曲ではないのでそのまま。

#### 茶畑と防霜ファン



山の上は一面の茶畑、茶畑には一定間隔で柱が立てられ、その天辺に扇風機が取り付けられている。何の為の扇風機かと興味を覚え、後でインターネットにて茶畑と扇風機をキーワードとして調べると、この扇風機は霜対策で、正式名称は防霜(ぼうそう)ファンと言うそうなる、一つ賢くなった。お茶博士の K 氏は知っているだろうな。このあたりは、「旅行けば駿河の国の茶の香り」で有名な駿河茶の産地。

#### 菊川石畳

その茶畑の中の自動車も走る舗装道を歩いていくと、今度は全長 611m の下りの「菊川石畳道」となる、考えてみたら下りの石畳道は初めて。登りよりも下りの方がはるかに歩きにくく、靴紐を締めなおすものの両足の親指の爪が痛くなる。いつのまにかハイキングの客はいなくなり、他に歩いている人はいない。

菊川石畳道を降りると集落があって、昔の間(あい)の宿の菊川、歩きやすい舗装道となる。間(あい)の宿とは宿場と宿場の間にある休憩所のこと、と言っても現代では休憩所も店も全く無し。



プランターに植えられたペットボトルの風車



この菊川で民家にペットボトルで作った色とりどりの風車が“植えられ”、回っているのを発見、もののけ姫の映画の中で顔が風車の様に回る妖精みたいなものが眼に浮かんだ。

舗装道は菊川集落を離れて山の中へ、急勾配の登りとなり、石畳道よりもこちらの方が距離もありきつい、口で大きく息をしながら登っていくと、口の中に唾液が溜まり、よだれとなって口の外へ、手で拭い、恥ずかしくなって思わずまわりを見るが、当然誰もいない。

夜泣き石



### 小夜の中山

周囲は茶畑か林、更に登り続けると、やがて有名な「小夜の中山」へ、ここは東海道3難所の一つで、昔から旅人を苦しめ、色んな遺跡があり、又通過する旅人が歌や句を残している。

まずは久延寺の夜泣き石、昔妊婦が山賊に殺されたがお腹の子は助かり、殺された母の霊が石にこもり毎晩泣いたので住職が読経して慰めたもの。この赤ちゃんはお乳代わりに水飴で育てられ、その水飴が子育て飴としてお土産に売られている。

妊婦のお墓



年たけて  
また越ゆべしと  
おもいきや  
いのちなりけり  
小夜の中山  
西行法師



東路の  
さやの中山なかなか  
なにしか人を思ひそめけむ  
東国へ行く人が  
きつと通るのが  
佐夜の中山である。  
中山のなかといえは  
なかなか(なまじっか)  
どうしてあの人に思いを  
掛けたのであろう。

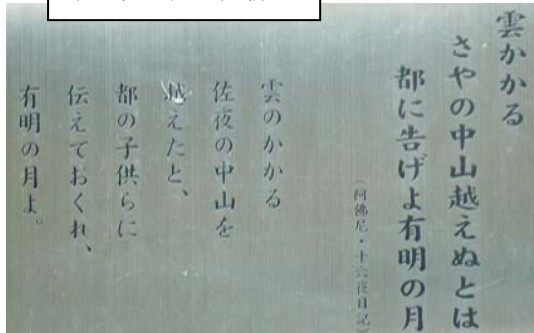
紀友則



碑のパレード

延々と続く茶畑の中を、アップダウンを繰り返しながら歩いていく。 大体 100m おきに歌碑・句碑があり、最初はそのたびに足を止めて写真を撮っていたが、余りの数の多さに、読み人知らずや聞いたことのない歌人の碑は素通りとなる。

十六夜日記の阿佛尼



命なり  
わずかのかさの  
下涼み  
松尾芭蕉



馬に寝て  
残夢月遠し  
茶のけぶり  
松尾芭蕉

途中に製茶工場があり、お茶の香りが漂っていて、ハイカーには「無料で冷茶接待」との看板があるが、誰も付近におらず、冷茶はお預け。

金谷か菊川あたりで昼食と考えていたが、行けども行けどもレストラン・食堂・コンビニの類は全く無し。久延寺の付近には「茶屋」風の建物もあったが、雨戸を閉めていて閉店中(廃業かも)。

やむを得ず、非常食としてリュックに入れてあるカロリーメイトをむさぼる。なんだか侘しい、ミュージックプレーヤーは、ジャズのビル・エバンスとなるが、これも雰囲気と全くそぐわない。

注: ミュージックプレーヤーは気に入った CD を 30 枚程ダウンロードしているので色んなジャンルの曲が順不同で流れてくる。

見える範囲は茶畑ばかり



見通しの良いところでは、見える範囲の山は全て茶畑、日本全国の茶の供給はこゝらで充分ではないかと思える程。



## 日坂 25 番目

自動車は登れないのでは思う程の急な下り坂となり、最後の「七曲り」の急坂を越えると次の日坂の宿が眼下に見えてくる。坂を降り、国道下のガードを過ぎ日坂(につさか)宿に到着。

日坂の浮世絵、急坂が描かれている



蔭戸のある旅籠、真ん中の蔭戸は半分開いている



日坂は往時の宿場の建物が保存されていて、各家には旧来の「屋号」が掲げられ、国道に近いこともあり、観光客が多い。

時刻は午後 3 時、ここからバスで掛川まで行く予定だったが、掛川行きのバスは土日は 2 時間おきで、しかも直前に通過したばかり。掛川で 4 時 45 分の電車に乗らなければならないが、ここから掛川駅まで 8Km、国道 1 号線に出てタクシーを捕まえるしかないと考え、国道に出てタクシーを探すが、全く見当たらない。少しでもタクシー代を節約しようと、掛川に向かって歩き始め、車が通る度にタクシーではないかと振り返るものの、全く気配無し。

結局、急ぎ足で歩いて掛川駅到着は 4 時半、電車には間に合ったものかなり疲労困憊、この間、空車はもちろん客を乗せたのも、上下共に、タクシーは 1 台も見なかった。静岡でもそうだったが、地方都市の郊外では本当にタクシーを見かけない、一体どうなっているのだろう。

本日は 6 万歩の歩いて約 35Km! ふーっ。

今回は東京駅八重洲口を深夜 12 時に出る夜行バスに乗り、朝の 5 時に掛川着、JR に乗って、藤枝駅でおりバスでスタート地点へ。帰りは掛川駅から JR で静岡、静岡から午後 6 時発の高速バスに乗り渋谷に午後 9 時帰着。

次回は 掛川 -> 袋井 -> 見付 -> 浜松

9日目

